

単独で、ナイフもなく、
徒手空拳で森に放り出さ
れて、

生きていけるだろうか？

～石器時代へのタイムト
ラベル 関野吉晴































































































































- 今から50年ほど前、ペルーアマゾンに、地図の空白地帯がまだ残っていた時代の話だ。
- パンチャゴーヤと呼ばれる地域は、マチュピチュやインカ帝国の首都があったクスコから100km～200kmしか離れていない地域で、インカ帝国がスペインによって滅ぼされた後、皇族，貴族など残党が逃れて行った失われた都市パイチチがあると言われてきた地域だ。外部の人間を寄せ付けずその地に、よそ者とはコンタクトのない先住民が暮らしていると聞いた。
- 未だ地図のない地域があり、そこに文明と隔絶された先住民がいると聞いて、熱くなった。その先住民マチゲンガに会いたいと、仲間2人と、すぐに準備を始めた。

- 一番最初に訪れた村では、私が訪れた時、全員が真っ青な顔をして、家から飛び出して、森の中に走り去っていった。言葉の分かる案内人がいたので、彼らを探して貰い、私たちが害のない人間たちであることを説明して、家に戻って来て貰った。
- その中の一家とは、もう50年の付き合いになる。女性は早婚なので、5世代の付き合いになる。彼らは、私が自然と人間との関係を考える時、多くの示唆を与えてくれる。つまり、私の師匠のようなものだ。
- 私が今年やりたいことは、今では家族のような付き合いになっているマチゲンガー一家との付き合いとは切っても切れないものだ。

- ①
- 彼らの家に泊めて貰い、同じ食べ物を食べて、居候生活をしてみて、気付いたことがある。彼らのゴミと排泄物と死体についてだ。
- 彼らもゴミをつくる。バナナやイモの皮、ゴザやカゴ、漁網、袋、衣類、ひょうたん容器などが壊れたり、腐ったりしたものはかき集めて、森に捨てる。
- そのゴミは森の生き物に食べられたり、ムシや微生物に分解されて、やがて土になる。その土のおかげで、植物や苔、菌類が育つ。それらを動物が栄養とする。
- ここでは、ゴミが厄介なもの、消え失せて欲しいものではなく、必要なものなのだ。
- 排泄物も森の中で、野糞、野尿だ。
- これも都会では水洗トイレに流されて、圧縮され、焼いてしまう。他の生き物たちに利用されることなく、二酸化炭素が排出されるだけだ。
- ここでは、他の生き物たちに利用される。
- 死体も都会では焼かれて、二酸化炭素が排出されるだけだ。一方、マチゲンガの世界では、埋葬されるか、川に流される。森では虫や土壌生物に分解される。アマソンの魚の多くは肉食魚なので、それらが死体を食べてくれ、その魚もいずれは他の魚や動物に食べられたり、自然死して腐食して、自然に戻っていく。
- 自然界では、生き物たちはリンクしていて、繋がっている。どんな生き物も役割があり、必要ない生き物はいない。全ての生き物が循環の輪の中にいる。都会に棲む私たちは完全に循環の輪の中から外れてしまっているが、マチゲンガは、自然界の循環の輪の中にすっぽりと入っている。

- 3年前から、ドキュメンタリー映画を作っている。「原発亡国論」の木村俊雄さんを追いかける映画を作ろうと始めたが、コロナ禍でうまくいかず、今は「うんこと死体の復権(仮題)」とタイトル先行の映画の撮影中で、夏から編集に入る。
- 文明社会では、邪魔物扱いになってしまったうんこと死体とゴミを見直してみようという映画だ。伊沢正名さん(糞土師).舘野鴻さん(生物画家).高槻成紀さん(保全生態学者)3人が主人公の映画だ。
- 45年前、私は山と溪谷の別冊で「ロビンソークルーソーの生活技術」というムックを出版した。私にとっては初めてのグラフィックな本だった。
- マチゲンガはナイフ一本あれば、一人でアマゾンの森に放り出しても、その素材で家、服を作り、食料を獲得して生きていける。その様子を、家、獲物、解体、魚、火、採集、旅、遊、酒、畑、衣料、筏、弓矢の15項目を、私が克明に撮った写真とイラスト、文章で表した本だ。
- コラムに
 - 「実験考古学・縄文人の道具を作り、使ってみた」「図説・古代人に学ぶ衣、食、住のすべて」
 - 「横井庄一さん30年の工夫の歴史」がある。
 - そして、「ナイフ一本で密林に放り出されたら、現代人は生きていけるか！」という、植村直己、西堀栄三郎さんらの鼎談がある。
 - 今回、私は「ナイフもなしで、単独で、徒手空拳で、森に放り出されたら私は生きていけるのか！」を試す試みを始めている。

- 3年前から、ドキュメンタリー映画を作っている。「原発亡国論」の木村俊雄さんを追いかける映画を作ろうと始めたが、コロナ禍でうまくいかず、今は「うんこと死体の復権(仮題)」とタイトル先行の映画の撮影中で、夏から編集に入る。
- 文明社会では、邪魔物扱いになってしまったうんこと死体とゴミを見直してみようという映画だ。伊沢正名さん(糞土師).舘野鴻さん(生物画家).高槻成紀さん(保全生態学者)3人が主人公の映画だ。
- 45年前、私は山と溪谷の別冊で「ロビンソークルーソーの生活技術」というムックを出版した。私にとっては初めてのグラフィックな本だった。
- マチゲンはナイフ一本あれば、一人でアマゾンの森に放り出しても、その素材で家、服を作り、食料を獲得して生きていける。その様子を、家、獲物、解体、魚、火、採集、旅、遊、酒、煙、衣料、筏、弓矢の15項目を、私が克明に撮った写真とイラスト、文章で表した本だ。
- コラムに
 - 「実験考古学・縄文人の道具を作り、使ってみた」「図説・古代人に学ぶ衣、食、住のすべて」
 - 「横井庄一さん30年の工夫の歴史」がある。
 - そして、「ナイフ一本で密林に放り出されたら、現代人は生きていけるか！」という、植村直己、西堀栄三郎さんらの鼎談がある。
 - 今回、私は「ナイフもなしで、単独で、徒手空拳で、森に放り出されたら私は生きていけるのか！」を試す試みを始めている。

- 以下は、今年一年のタイムテーブルです。

- 石器時代の家づくり、生活用具作りと採集狩猟生活

- 黒曜石の原石を探しナイフを作る。石斧用に蛇紋岩を探し、磨製石器をつくる。その石器で木を切り、木製の工具をつくり、家を立て、かまどをつくる。狩猟、採集に必要な民、漁網作り、料理のための火おこし棒、土器の粘土探しをして、土器作り。石臼作り。樹皮、蔓、根を繊維化した紐、ロープ、鹿皮のなめし、有機綿花栽培、衣類作りなど地下資源を使わない、生物資源利用だけの持続可能な家づくり、道具作りを追求していく。

- 期間 第一期2023年1月～12月

- 場所 東京西部の森

- 1～3月 石器時代の半地下式家屋づくり

- 並行して 火起こし 炉作り

- 粘土を探して、野焼きで土器づくり、

石臼づくり

- 縄、紐づくり、籠、ゴザ、鍋置き、草鞋

- 蛇紋岩で石斧、流紋岩で砥石、黒曜石で石斧、ナイフ作り

- 竹の食器、ナイフ、家の内装づくり

- 4月 罾猟で猪、鹿を獲る
- オーガニックコットン栽培
- 並行して、漁網づくりで魚を捕る
- 皮を舐めす
- 野苺など野生フルーツ採集
- ひょうたん栽培
- 昆虫及びその幼虫の採取と食用として使う。
- 5月 糸づくり、鹿角針作り 竹のドームづくり 桃、栗の植樹 蜂蜜飼育
- 6月ザリガニ、カエル。ヘビの採取、焼い食べる
- 7月 籠、敷物、瓢箪容器
- 9月 ドングリクッキー作り
- 栗採集
- 10月 赤麻アカソ、カラムシの繊維で服づくり、草鞋、藁のブーツづくり
- 11月 ウサギの飼育開始
- 12月 楽器作り 口琴、ケーナ、サンポーニャ、
- 太鼓 打楽器